続 徒然つれづれ

デスクの英断

桑野　巍

「人間様が試されているような時代になったね」。急にやって来た数多くの危機に直面している状態を冷静すぎる目で見ている友人がこう言った。数多くの危機とは金融関連、企業経営、雇用、医療、福祉、環境、格差、輸入食品などの問題だろう。彼は「僕は自分なりの生活警報を発令して生活している」と言い、この警報を当分解除しないと言うのだ。

彼の堅実な生き方は学ぶべきだが、彼の本音は「マスメディアが意識的に不況とか貧困を煽り立てているきらいはないか」ということで、メディアの報道姿勢に矛先を向けていると受け取った。そこで第一線の企業経営者に「メディアの姿勢は正しいですか」と愚問をぶつけてみたら、経営者はメディアの姿勢をあえて論評せず「混沌混戦は世の常。メディアの報道は情報の一つとして受け入れる」と超然としていた。

百戦錬磨の経営者は「こうした変化の激しい時代こそ生き残るための方向を見定めるのが指揮官の役割ですから」と言い切り、臆病になってはならないと自分に言い聞かせているような顔つきだった。とはいえ、ともすると情報洪水に流されそうになっているのが弱気の消費者だ。報道の川上に寄居するメディアが「これでもか」と伝える暗いニュースに「明日は我が身」を重ね、心理的危機を招いている。

そこで情報発信メディアの中心的役割を果たしている報道機関のデスク（編集関係部の次長ら）業を紹介してみたくなった。デスクは通常複数名で構成、交代勤務で取材指示を出し、企画ものを立案し、記者が書いてくる原稿をチェックする。いわゆる原稿の第一読者で、疑問点を遠慮なくただすと同時に記者から何を言われてもひるまない強者なのだ。

記者の中にはかけ出しもいれば中堅、ベテランもいるが、自らが打席に立ってはいけない。記者の原稿を見ながら「俺の方がよほど上手いのに」と思ったり、自分のヒラ当時の自慢話は一切禁句。記者たちの個性をどう引き出すかが大事で、一線記者と常に対話することを忘れてはならないと先輩デスクから教わったものだ。

日刊紙やＴＶ、ラジオのデスクはいつも時間との戦いのほか“完全原稿”の責任を負わされている。完全はあり得なくても、限りなく完全原稿に仕立てるのがデスクの役目だ。俊敏聡明に映る一線記者も、その実像は玉石混交で、時流底流やその背景を完全にとらまえているとはいえない記者もいるからだ。だから「誤りのない」記事かどうかのチェックに細心の注意を払うのがデスクだ。

新人記者は実務を学習中だし、中堅どころは気負いと自信が先行しがちで、限界を超えると危険と紙一重で「角を矯めて牛を殺さぬ」よう用心しなければならない。またベテランは慣れによる感覚の鈍化に陥ることのないようなリードが必要だ。「とかくデスクはよく怒鳴る」といわれるが、怒鳴らないデスクはいないと思う。デスクは怒鳴ったあとで冷静さを取り戻し「なんであんなに大声をあげたのか」と自己嫌悪に陥ることもしばしばで、デスク業にある者はとかくストレスが溜まる。

私はデスク業を３年間で無事卒業したが正直に言って神経を使った。それでも今思えば良い経験をさせてもらったと感謝している。ただ現役デスクの時、わが社は少数精鋭なのだから脱落者を出してはならないと思い、記者諸君に「原稿より健康」と、つい口が滑ったことを悔いている。この時、原稿本数の少ない記者が「それはわれわれに対する皮肉でしょうか」と言っていたが、私はこのことをさして気にしなかったものの苦い思い出だ。

メディアが申し合わせたように不景気を煽っているとか、暗い惨めなニュースばかりを伝えているという見方も当たらなくはないが、情報発信という過激な競争社会の中では仕方のないこと。報道機関の中核にいるデスクは心を鬼にしてメディア業界の強者、勝者であることを狙っている。だからデスクは経営管理者の一面も負わされており、オーケストラでいえば指揮者でもある。よりよい音色を奏でるため気分よく指揮棒を振っているのだ。そこでこの指揮者（デスク）たちに望みたいのはつましい生活をしている人たちや若者に希望をもたせるような明るい話題を報道してほしいのだ。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）